



一橋新聞部
〒186-8601
東京都国立市中2-1
一橋大学西キャンパス
学生会館別館1F

編集長 亀田英太郎
印刷 ウェブプレス
<http://hit-press.org/>

新人記者募集中

加藤ゼミ記事削除要求

毎日新聞社、ゼミ側に謝罪

1月15日、毎日新聞政治ブ
レミアにて、同紙大貫智子記
者による政治コラム、「韓国
文化を楽しむなら加害の歴史
に向き合うべきか」が公開さ
れた。当コラムは、本学の加
藤圭木ゼミの学生が出版した
書籍や、それに関連したイ
ベントについて批判したもの。
加藤ゼミは、当該記事の掲載
にあたって事前に直接の取材
が一切なかったことなどを理
由に毎日新聞社への抗議を行
い、2月11日、当該記事が削
除された。

本人への取材については、依
頼したものの実現しなかつ
た。
その先へ「みんまで話し合
う」「日韓」のモヤモヤ」と
題する対面イベント（オンラ
イン配信併用）を開催した。
完全事前申し込み制で参加人
数は限られていたが、ゼミ生
本著者、ゲスト、読者らが
参加し、盛況のまま幕を閉じ
たという。

問題となったコラムが公開
されたのは、今年1月15日。
加藤ゼミでは、協議の上、28
日には毎日新聞社のご意見・
お問い合わせフォームに抗議
文を提出した。2月7日、編
集編成局政治部長と社長室広
報担当の2名が来校。協議の
末、11日には取材が不十分だ
ったことを認め、15日には同2
名が再度来校してゼミ生らに
直接謝罪した。なお、本件の
経緯は加藤先生の研究プログ
に詳述されている。

今回の記事の問題はどこに
あったのか。加藤先生が特に
指摘するのは、コラムの公開
にあたり、直接の取材や事前
連絡が一切なかったことだ。
当コラムは、書籍及びイベン
トの動画配信のみを基に書か
れたもので、加藤ゼミ側に反
論の機会は一切与えられなか
った。しかも、一橋祭でのイ
ベントは登壇者やゼミ生の人
権・プライバシーへの配慮か
ら、完全事前申し込み制をと
っていた。開催場所の詳細は
参加者にしか公開せず、Yo
uTube上での配信視聴に
も氏名や住所・電話番号など
の記入が必要だった。参加申
し込みページにも「登壇者や
ゼミナール学生の個人情報・プ
ライバシーの保護について、十
分にご配慮ください」と明記
されており、加藤先生によれ
ば「本イベントの様子を外部
へ公開することについて、通
常以上に配慮が必要であるこ
とは、だれもが理解できるよ
うな状況だった」という。

ゼミ生たちも、参加者を限
定した空間での発言が突如切
り取られて批判されたことに
恐怖を覚えたという。本イベ
ントの趣旨は、日朝関係とい
うデリケートな問題につい
て、クローズドな場で安心し
て意見交換をすることにあっ
た。しかし、今回問題となっ
たコラムは許可なく当該イベ
ントを取り上げただけでなく、
個人が特定されかねない表
現を用いるなど、イベントの
趣旨を没却していると感じ
たという。あるゼミ生は「個
人の批判と大手メディアの批
判では影響力が違う。非公開

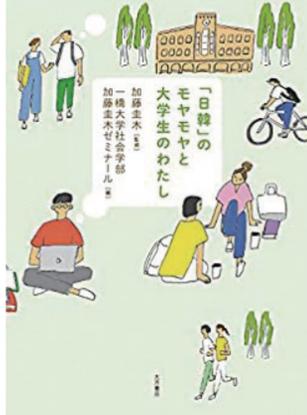
1月15日、毎日新聞政治ブ
レミアにて、同紙大貫智子記
者による政治コラム、「韓国
文化を楽しむなら加害の歴史
に向き合うべきか」が公開さ
れた。当コラムは、本学の加
藤圭木ゼミの学生が出版した
書籍や、それに関連したイ
ベントについて批判したもの。
加藤ゼミは、当該記事の掲載
にあたって事前に直接の取材
が一切なかったことなどを理
由に毎日新聞社への抗議を行
い、2月11日、当該記事が削
除された。

本人への取材については、依
頼したものの実現しなかつ
た。
その先へ「みんまで話し合
う」「日韓」のモヤモヤ」と
題する対面イベント（オンラ
イン配信併用）を開催した。
完全事前申し込み制で参加人
数は限られていたが、ゼミ生
本著者、ゲスト、読者らが
参加し、盛況のまま幕を閉じ
たという。

問題となったコラムが公開
されたのは、今年1月15日。
加藤ゼミでは、協議の上、28
日には毎日新聞社のご意見・
お問い合わせフォームに抗議
文を提出した。2月7日、編
集編成局政治部長と社長室広
報担当の2名が来校。協議の
末、11日には取材が不十分だ
ったことを認め、15日には同2
名が再度来校してゼミ生らに
直接謝罪した。なお、本件の
経緯は加藤先生の研究プログ
に詳述されている。

今回の記事の問題はどこに
あったのか。加藤先生が特に
指摘するのは、コラムの公開
にあたり、直接の取材や事前
連絡が一切なかったことだ。
当コラムは、書籍及びイベン
トの動画配信のみを基に書か
れたもので、加藤ゼミ側に反
論の機会は一切与えられなか
った。しかも、一橋祭でのイ
ベントは登壇者やゼミ生の人
権・プライバシーへの配慮か
ら、完全事前申し込み制をと
っていた。開催場所の詳細は
参加者にしか公開せず、Yo
uTube上での配信視聴に
も氏名や住所・電話番号など
の記入が必要だった。参加申
し込みページにも「登壇者や
ゼミナール学生の個人情報・プ
ライバシーの保護について、十
分にご配慮ください」と明記
されており、加藤先生によれ
ば「本イベントの様子を外部
へ公開することについて、通
常以上に配慮が必要であるこ
とは、だれもが理解できるよ
うな状況だった」という。

ゼミ生たちも、参加者を限
定した空間での発言が突如切
り取られて批判されたことに
恐怖を覚えたという。本イベ
ントの趣旨は、日朝関係とい
うデリケートな問題につい
て、クローズドな場で安心し
て意見交換をすることにあっ
た。しかし、今回問題となっ
たコラムは許可なく当該イベ
ントを取り上げただけでなく、
個人が特定されかねない表
現を用いるなど、イベントの
趣旨を没却していると感じ
たという。あるゼミ生は「個
人の批判と大手メディアの批
判では影響力が違う。非公開



事の発端となった『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の表紙（提供：加藤圭木ゼミ）。2021年7月21日に発行され、現在第6刷まで増版されている。

2022年6月頃、本書執筆には携わっていなかった3年生のゼミ生たちの間で、本書に関連したイベントの企画が持ち上がった。ゼミ生主体で企画は進み、同年11月19日、一橋祭にて「モヤモヤ本

一方の問題点として、加藤先生は、現在まで大貫記者本人から経緯の説明や謝罪などがないことを指摘する。また、加藤ゼミとしては経緯の説明を含めた謝罪文を毎日新聞ウェブサイトに掲載するよう要求しているが、実現されていない。ゼミ生の一人は、「本

毎日新聞社社長室広報コニ
ットは、当該取材に対し「本
件記事執筆までの経緯や記事
削除の理由については、加藤
圭木准教授および加藤ゼミの
みなさまと面会し、ご説明し
たところで」とコメントし
た。また、加藤ゼミ側が重要
視する大貫記者本人からの説
明については「加藤ゼミの皆
様への説明は、大貫に対する
聞き取りを踏まえ、大貫や出
稿を受け持ったデスクとも認
識を共有したうえで社として
答えたものです」との言及に
とどめ、今後大貫記者がゼミ
側へ直接説明をする機会を設
けるかについては明言しなか
った。

「あなたの大学生活の相棒
になるように」を謳う一橋名
鑑。担当者は、一橋生の二
つに、各サークルやゼミのイ
ベント一覧を一括してカレン
ダーに表示するものがある。
これ以外にも、本学の団体が
行っている競技の試合のリア
ルタイム配信、スコアの速報
表示も考えている。さらに、
閲覧数の増加によって企業か
らの広告収入を得られた場
合、サイト内でイベントを実
施し、賞金を配るなどとして、
広告収入を一橋大生へ還元す
るといった斬新な構想もあ
るそうだ。

一橋名鑑サービス開始

本学の情報一元化目指す

2023年4月1日、情報
サイト「一橋名鑑」が開設さ
れた。同サイトは、本学に関
する情報の一元化を目指すも
ので、本学の学生団体である
濫澤塾が運営する。今回は運
営団体の濫澤塾の担当者の方
に、一橋名鑑開設までの裏側
のお話を伺った。

運営元である濫澤塾とは、
2020年に創設された大学
公認のオンラインコミュニティ
団体。「大学生活をデザイ
ンする」を掲げて、学生間の
交流である自主ゼミやOBO
G講演などの、多種多様な企



毎年の季節になると、自己紹介の機会が増える。中でもよくされる質問が、「ご趣味は？」だろう。僕はいつも、ほのかな罪悪感とともに、「趣味は読書です」と答えることにしている。▼休日、僕はよく近所の本屋を訪れる。本屋はいい。きれいに陳列された書籍。静かに本を選ぶ客。かすかに聞こえる上品な音楽。安っぽい表現だが、そこはとも知的な空間だ。そこにいるだけで、なんだか自分が、教養ある、高尚な人間であるかのように思えてくる。部屋に戻ると、上京の際に父が買ってくれた木製の本棚がある。一人暮らしの学生には不向きな、大きくて上品な本棚だ。ふと目をやると、これまで集めた文庫本たちが、澄ました顔で並んでいる。教科書や評論で名前だけは聞いたことのあるような、ちよっと小難しい小説たち。この部屋に遊びに来た友人は、この本棚を見てどう思うだろう。そんなことを考えてしまふ自分に気づき、慌てて目をそらす。▼別に、本の内容に興味がないわけではない。買ってきただけの本は目を通すし、好きな作家だっている。しかし、本棚を見てみるとたまに、何かうそをついているようないたたまれない気持ちになることがある。それはちょうど、食玩に申し訳なきそうについてくる小さなラムネ菓子を、こっそりごみ箱に捨てるときに似ている気がする。▼今日もどこかで、「ご趣味は？」という儀礼的な問いが飛び交っているだろう。自己紹介に求められるのは無難な答えだ。厳密にそれが趣味と呼べるかどうかなど誰も興味はない。だいたい、多くの人は、何の屈託もなく披露できる趣味があるのには違いない。同類を見つけて安堵しようとしても、所詮は独り相撲かもしれない。は、十分承知している。それでも、誰かに趣味を尋ねるとき、その表情に一瞬の驕りを探してしまふ悪癖が、どうしても抜けられない。

【亀田英太郎】

OIST・一橋共同インターン発足

学びを実践で生かす

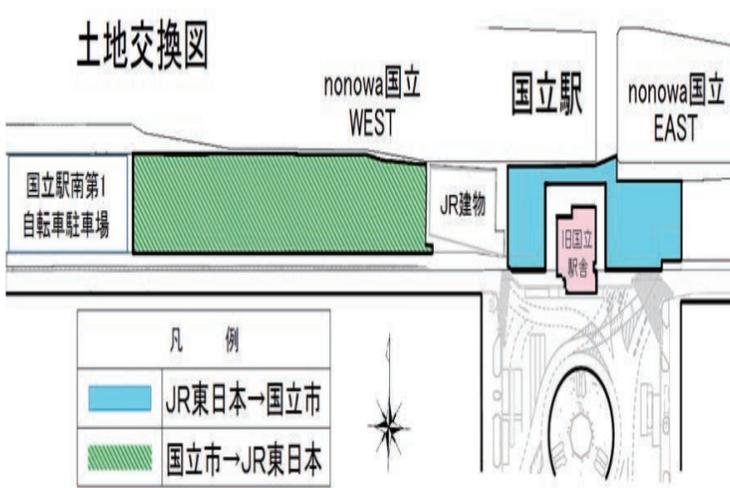
昨年9月16日、本学と沖縄科学技術大学院大学(OIST)が共同プレスリリースにて、「OIST・一橋インターンシップ・プログラム」の立ち上げを発表した。当プロジェクトは、OISTにおける科学技術研究と本学の経営・ビジネス研究の連携を通して、科学技術実用化の加速を目指すもの。本学大学院経営管理研究科国際企業戦略専攻(OCS)で経営学を学ぶ学生のうち有志が参加し、市場調査やマーケティング戦略といったビジネスの面から科学技術の事業化に取り組む。第1期生となる令和4年度のインターン生には、5名が選出された。参加学生たちは、インターン生として沖縄に滞在し、OISTのディープテック関連プロジェクトやスタートアップ企業に参加した。また、インターンシップ後となる12月には、フィードバックセッションも開催された。本紙では、笠井直子先生(OCS特任助教)と参加学生2名に取材し、当プログラムの内容やその魅力に迫った。

まず、笠井特任助教に参加先のプロジェクトについてお話を伺った。発足初年となる昨年度は、インターンシップ先として10のプロジェクトが協力してくれた。それらのほとんどがスタートアップ企業による事業と、OIST発の研究を基にしたプロジェクト

だという。インターン先の事業例の一つとしては、産業廃水処理分野の研究を活かしたスタートアップ「Waterium(ワタスミ)」などがある。インターン生は、参加先の事業と提携し、市場調査やマーケティング戦略の議論、プレゼンテーション等を行った。当プログラムならではの魅力はどこにあるのか。笠井特任助教は「MBAの学生が、学びを実践に移すことのできる機会がなかなか少ない。OIST・一橋インターンシップは、まさに今から事業化を目指すプロジェクトに参画し、実践の場で何が必要とされているかを知るとともに、MBAで学んだことを実際に活用できる貴重な場だ」とし、当プロジェクトの意義を強調した。

今回のインターンシップに参加したマック・サラさんは当インターンシップについて、「さまざまな志を持つ人々と交流し、学びあうことのできる、研究や技術開発の環境を魅力に感じた」と振り返る。また、インターンシップについて「非常に満足している。最先端技術に携わる人々の会合に参加し、様々な事業についての話を聞いたことは大変刺激的だった。ディープテック起業トレーニングでは、互いの事業アイデアや戦略について議論し、幅広い研究分野

国立駅南口に新施設建設予定 背景に、駅周辺の景観保護



2021年にJR東日本と国立市が行った、用地交換の概要図。この用地交換が、今回の開発計画の基盤となっている。(提供：国立市)

JR東日本グループと国立市の連携による国立駅南口の開発計画が進んでいる。本計画で建設される商業ビルと賃貸住宅棟は共に令和6年度の開業を目指している。当記事では、本計画の概要について紹介するとともに、国立市による国立駅周辺整備との関連という視点から、本計画の策定の経緯について掘り下げる。

今回、国立駅南口の開発予定地に建設される施設は2つ。商業棟(仮称 nonowa国立SOUTH)と賃貸住宅棟が、JR東日本グループによって建設される予定だ。そして、本計画の特徴として、連携して開発を行う国立市による、当該施設内での行政サービスの提供が挙げられる。賃貸住宅棟の一部を国立市が貸出し、「国立駅南口子育て支援施設」が設けられる予定だ。この子育て支援施設

の整備計画は、2017年に策定された「国立駅南口複合公共施設整備基本計画」における、「子ども・文化・賑わい」という南口エリアのコンセプトに端を発する。子ども憩う場が駅周辺に少ないという課題を受け、南口の整備方針に「子育て」の観点が盛り込まれたのである。子どもや子育て世代の居場所、情報交換の場としての役割を果たすため、子どもが自由に遊べる「子育てひろば」や一時保育などの設備が施設に導入されることとがこれまでに公表されている。

右記のような開発計画に至る経緯には、市による国立駅周辺の景観保護が大きく関係している。駅前の景観保護のために行われたJRと市による南口の用地交換が当該開発計画の基盤となっているからだ。2017年、当時再建が主な目的とした施策の一つとして南口開発計画は位置づけられる。

市はどのような理念をもって一連の駅前整備を行っているのか。国立市都市整備部国立駅周辺整備課の外立健治さんは、駅前整備を通じて大学街が作られた大正時代当初の思いや理念を継承したいと語る。特に、駅舎の前を自由に人々が行き来する大正15年の風景を特別な日として再現しようとして、人々が駅前空間を自由に活用できる機会を設けているという。例えば、昨年11月の第53回くにたち秋の市民まつりでは、普段は立ち入ることのできない円形公園が解放され、多くの人が集い、旧駅舎を軸とした活気ある駅前空間が非日常的に再現され

画していると報道されたことが転換点となった。この報道に対し、市民やまちづくり推進団体は旧駅舎を中心とする国立固有の歴史ある景観が損なわれるのではないかと懸念した。これを受け、市とJRは南口開発への協議を開始。その結果、2021年JR所有の旧駅舎周辺の土地と市所有の土地を交換し、JRは取得用地において開発を行うという合意に至った。以降、JRと市が連携して駅周辺のまちづくりを進めるという方針のもと、南口開発計画が進められてきた。

市はどのような理念をもって一連の駅前整備を行っているのか。国立市都市整備部国立駅周辺整備課の外立健治さんは、駅前整備を通じて大学街が作られた大正時代当初の思いや理念を継承したいと語る。特に、駅舎の前を自由に人々が行き来する大正15年の風景を特別な日として再現しようとして、人々が駅前空間を自由に活用できる機会を設けているという。例えば、昨年11月の第53回くにたち秋の市民まつりでは、普段は立ち入ることのできない円形公園が解放され、多くの人が集い、旧駅舎を軸とした活気ある駅前空間が非日常的に再現され

以上のように、現在国立市とJR東日本グループによって進められている国立駅南口開発は、旧駅舎を中心とした景観を保護するための整備の一環として捉えられる。南口開発に限らず、一連の駅前整備の背景には国立という街が作られた当初の風景の再現という大きな理想があるようだ。今後も国立駅周辺を、駅前整備計画同士の関連性や過去の駅前風景との比較という縦横につながる観点を通じて見守っていききたい。

学部の管理を行っているのは学部協議会だ。その役員は新入生歓迎委員会、一橋祭運営委員会、KODAIRA祭実行委員会のいずれかを経験した3年生から構成されている。

学部協議会の主な活動は、掲示板の状況のチェックなど、大学構内の治安維持だ。また、学生支援課などからの要請や学内団体・学生個人からの相談・意見にも対応している。さらに昨年から、年前整備計画同士の関連性や過去の駅前風景との比較という縦横につながる観点を通じて見守っていききたい。

自治団体連合費納入率減少 学部協議会の対策は

一橋祭運営委員会やKODAIRA祭実行委員会など、一部の学生団体の活動資金は、学生らから集められた「自治団体連合費」によって賄われている。しかし、新型コロナウィルスの流行により、同費の納入率は低下の一途をたどっている。当紙では、自治団体連合費の現状と納入率上昇のための取り組みについて、2022年度学部協議会の中山凛会長(法4)にお話を伺った。

自治団体連合費は、本学のイベントや部活・サークルの運営など、学生の生活に資する活動を行うための資金だ。新入生歓迎委員会、一橋祭運営委員会、KODAIRA祭実行委員会、一橋新聞部、体育会総務、文化団体連合の6団体が利用している。自治団体連合費は各団体の会計担当者と相談したうえで振り分けられており、各団体が毎年提出する会計状況を見ることでその用途を確認できる。

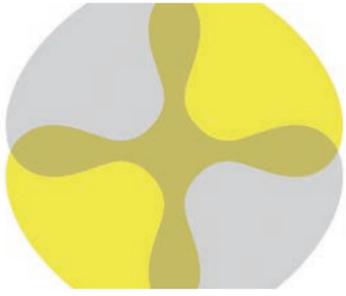
中山会長は、「各団体の活動は自治団体連合費なくしては成り立たず、またその活動を通じて、学生全体に利益を還元している」と述べ、自治団体連合費の必要性を強調する。そして、学生たちに対し、「自治団体連合費の目的を理解した上で、また納入していない方にはぜひ納入をお願いしたい」と、呼びかけた。

中山会長は、「各団体の活動は自治団体連合費なくしては成り立たず、またその活動を通じて、学生全体に利益を還元している」と述べ、自治団体連合費の必要性を強調する。そして、学生たちに対し、「自治団体連合費の目的を理解した上で、また納入していない方にはぜひ納入をお願いしたい」と、呼びかけた。

【中村彩乃】

【中尾文香】

【辻裕】



Social Data Science

SDS 学部長・研究科長インタビュー 渡部敏明教授

今年4月、ソーシャル・データサイエンス学部・研究科(以下、SDS)がいよいよ本学に開設される。当紙では、SDS設置までの取り組みと今後の展望について、渡部敏明教授(ソーシャル・データサイエンス学部長・研究科長)にお話を伺った。

SDSの開設準備は、2020年10月に設置された

ソーシャル・データサイエンス教育推進センター(以下、センター)を中心に進められた。渡部教授は「文部科学省からの設置認可を得るために大量の書類を書く必要があり、また所属教員を十数名採用することにも大変な苦労があった」と当時を振り返る。そのため、昨年8月に実際に設置が認可されたときには非常に嬉しく思ったという。

こうして今春開設されることになったSDSだが、その特徴はどこにあるのか。改めて渡部教授に尋ねた。SDSではその名の通り、社会科学とデータサイエンスを融合させた教育を行う。現代社会の課題を解決するためには、データサイエンスの知識がますます重要になっているが、この知識を実社会に応用するためには、社会科学の知識もまた不可欠となる。社会科学の総合大学としての本学の強みを活かした両面的な教育こそが、近年流行中の他大学のデータサイエンス系学部と一線を画す、本学SDSならではの魅力だという。

SDSの設置は、既存4学部を含めた本学の教育全般に、どのような影響を与えるのだろうか。渡部教授は、S



取材に協力して下さった、渡部敏明 SDS 学部長・研究科長 (提供: 本学広報課)

DSの設置は本学全体に恩恵をもたらすだろうと語る。確かに、データサイエンスは既存の4学部でも一部教えられてきたが、それらはあくまでも伝統的な統計学を中心とした内容であった。対してSDSでは、Aいや機械学習、言語処理や画像処理など、より先端的なデータサイエンスについても体系的に学習することができるといふ。そのため、データサイエンスに関心を持つ他学部生に対しては、「ぜひSDSの講義を履修して、データサイエンスの技術を身に付けてほしい」という。また、特定の社会科学領域の学習を深めたいSDSの学生には、他学部の専門的な講義の履修を推奨する。SDSの設立により、学部間の垣根を超えた柔軟な履修ができるという本学の魅力が、ますます深化していくことだろう。

今回のSDS新設は、周囲からどのように受け止められてきたのか。渡部教授は、ソーシャル・データサイエンスという聞き慣れなく新しい学問領域に対し、謎めいた印象を持った方が多いと感じているという。象徴的だったのは「ソーシャル・データサイエンス学部」という名称に対する

周囲からの反応だ。この名称が横文字でかつ長いため、既存の商経法社の4学部になじまないとして、賛否両論が渦巻いた。渡部教授はこうした指摘にも一理あるとしながらも、正確性を重視する以上、ほかの言葉には代えられないと話す。「データサイエンスは、Aいや統計学、情報科学などを含んだ幅広い学問領域で、それに対応する日本語は未だない。そして、この横文字に付す言葉は『ソーシャル』

一橋生専用時間割アプリ「バシコマ」 新入生をターゲットに普及目指す

昨年11月、一橋生専用の時間割アプリ「バシコマ」がリリースされた。本学に特化した時間割アプリの登場は初となり、大きな注目を集めている。そこで、開発者の一人、竹内昭広さん(商3)に、学生ならではの視点を活かした機能や設計、そして今後について、話を伺った。

アプリの特徴として最も大きいのは、「シラバス」と「コミュニティ」である。「シラバス」では、CELS上では別々にしか見られなかった授業の詳細と成績分布表を一度に確認可能だ。また、気になる授業をブックマークに登録することができる。さらにレビュー機能があり、授業の評価を5段階評価で見られるため、履修登録に大いに役立つ。「コミュニティ」とは、友達登録したユーザーの時間割を見ることができ、友人と時間割を共有する面倒な手間が省ける。「リンクス」という機能の中では、CELSやmanabaをはじめと

して、大学が運営するサイトや、ハイッタなどの学内メディアに飛ぶことができる。さらに、安全性や信頼性にも配慮している。アプリには、直接manabaやCELSにログインできるようにするために、学籍番号とパスワードを保存するシステムがあるが、これらは使用する端末に保存されるだけで、情報漏洩の恐れはない。また、レビュー機能についても、1人の学生に対してアカウントを1つに限定する仕組みを採用することで、信頼性を担保している。

この一件が示唆するよう、SDSの今後についてコメントをいただいた。渡部教授は「以前所属していた経済研究所とセンターでは受験生はもちろん、企業や官公庁などを含めた社会全体にSDS設置の意義や社会へのインパクトを理解してもらうべく、精力的に広報活動を行ってきた。昨秋には学部・研究科独自のオープンキャンパスを、12月にはJR東日本のトレインチャネルでの広告掲載を行い、受験業界などからの取材依頼にも積極的に応じた。それが功を奏したのか、初年度入試

【齊藤丈一郎】



「バシコマ」のロゴマーク(写真右)と、シラバス検索画面。アプリでは、CELS上でシラバス検索をするよりも詳細な条件で絞り込みをすることができる。



アプリ制作の中心となったコンピューター研究会の3人。左から、佐藤里緒さん(社3)、竹内昭広さん(商3)、築地里桜さん(法3)。

アプリを中心になって制作したのは、竹内さん、築地里桜さん(法3)、佐藤里緒さん(社3)の3人だ。3人は、学内団体の一つであるコンピューター研究会で知り合い、なにか1つアプリを作ろうという話の中で「せっかくなら一橋生に向けて」と、時間割アプリの開発に乗り出した。業界では「エンジニアの修正やプログラムコードの改善を続けている。活動のやりがいについて、竹内さんは「エラーが出るというところが、原因

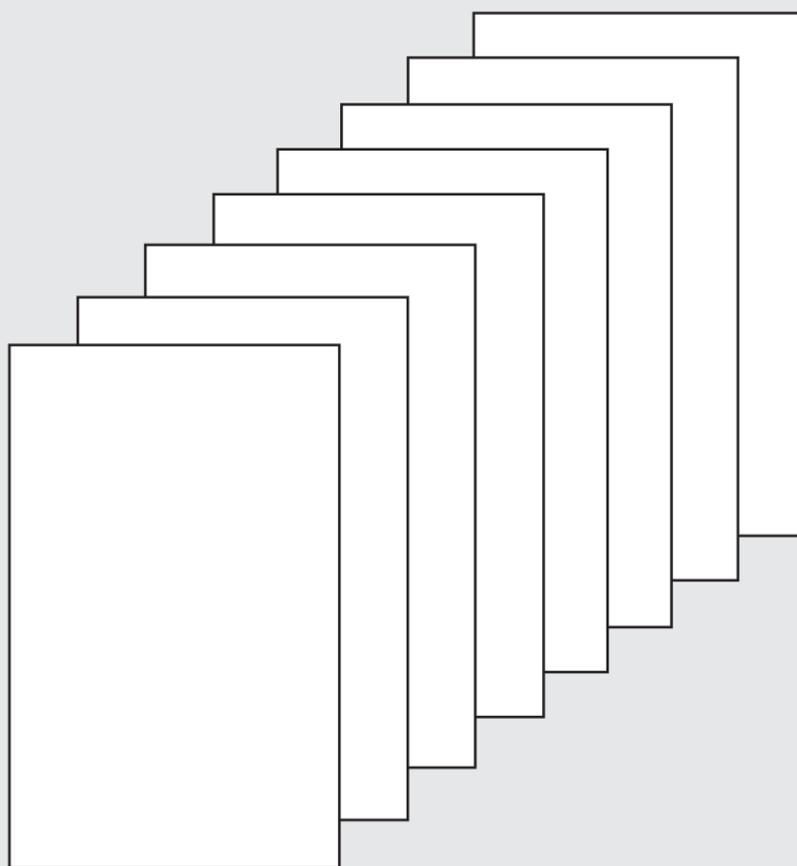
「バシコマ」のロゴマーク(写真右)と、シラバス検索画面。アプリでは、CELS上でシラバス検索をするよりも詳細な条件で絞り込みをすることができる。

紙上の編集室
この度は当紙紙面をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。一橋新聞部は実働人数10人ほどの小さな部活ですが、それぞれが自分の持ち味や興味関心を生かして仲良く活動しています。学年問わず新人記者を募集していますので、興味のある方はお気軽にご連絡ください。

【友定隆】
*携帯アプリについては、アプリのデザインのことを指す

を見つければ、直すことができる。とやっぱ楽しい」と話す。今後は、開発メンバーの卒業後を見越し、アプリを管理できる後進の育成や、コンピューター研究会による組織的な運営を目指すという。
アプリはさらに拡充される予定で、学内団体が運営するWebサイトのURLをさらに多く張り付けたり、「コミュニティ」を充実させて、SNSのような使い方をできるようにしたりすることも視野に入れている。また、広告に関しては「基本は入れない方針ですが、入れるとしてもあまり邪魔だと思わないところに」としている。
現在の利用者は500人ほど。新入生をメインターゲットにしており、8割の新入生が利用することを目標に掲げる。竹内さんは最後に「私たちの時間割アプリが、みなさんの大学生活の助けになればうれしいです。アプリはまだ未完成であり、学生のみならず作り上げていきたい。そのため、意見や要望があれば積極的に教えてほしい」と話してくれた。

言葉を紡ぎ、
歴史をつなぐ。



第百代編集部、記者募集中。

一橋新聞部

メール：newcomer@hit-press.org【新歓担当：友定（経2）】「一橋新聞WEB」：hit-press.org
新歓 Twitter：[@hitpress_info](https://twitter.com/hitpress_info) 公式 Twitter：[@hitpress](https://twitter.com/hitpress)
部会见学、体験入部も募集中